



富山市の遺跡物語



みずほしかねひろ なかばんば すこくばん
水橋金廣・中馬場遺跡から出土した双六盤

安土桃山時代の館の施設とみられる方形堅穴状造溝の底から出土しました(p.9参照)。双六盤には板を組み合わせて作る箱型のものと、一本の木で作る厚板状のものがあります。これまで絵画資料(『鳥獣人物戯画』や『長谷雄草紙』、『花下群舞図』など)に登場していた厚板状の双六盤の実物が国内で初めて完全な形で出土しました。

この頃の双六は江戸時代以降盛んになった縦双六とは異なり、二人で対戦するゲームです。白黒各々15個の駒を2個のさいころの目にしたがって進め、相手陣地に駒を全部送り込んだ方が勝ちとなるゲームで、囲碁や将棋と並んで広く親しまれていました。

出土した双六盤の本体はケヤキで、盤の収縮をやわらげるためにクロベが埋木として用いられています。底部中央には現在の将棋盤の底部にも見られる「ヘソ」(「血溜り」ともいう)が台形状に削り出されています。駒を打った時の音響効果をねらったのでしょうか。盤の大きさは、長辺37.6cm×短辺26cm×厚さ18.2cmです。

実際によく使用されたため盤面がすり減っており、堀で囲まれた館に住む武将達が双六に興じていたことが推測されます。双六普及の実態を究明する上で遊戲史上の貴重な資料となりました。

第2回「奈良時代の富山を探る」フォーラム

近年、富山市柄谷南遺跡や水橋荒町・辻ヶ堂遺跡、米田大覚遺跡など古代の重要な遺跡発掘調査が相次いで行われています。それらの調査成果をもとに、平成12年度から「奈良時代の富山を探る」フォーラムを開催しています。昨年の第1回目のフォーラムでは「古代の道と駅」をテーマに、古代北陸道の規模やルートについて討論が行われ、大きな成果をあげました。

平成13年度は「古代北陸の国と郡の成り立ち」をテーマに、古代のコシ（古志・高志・越）国をめぐる最新の研究や越中国四郡の領域をはじめとする地域的特色について検討を行いました。

●第2回フォーラム「古代北陸の国と郡の成り立ち」の概要

平成13年9月30日（日）、昨年と同様に水橋ふるさと会館を会場としてフォーラムを開催し、地元水橋の皆さんをはじめ、県内外から約230名の参加がありました。

フォーラムは地元紹介・事例報告・特別講演・討論（フォーラム）という四部構成で行いました。当日のプログラムは次のとおりです。

□地元紹介 杉村利一（（財）水橋郷土史料館常務理事）「往還道（北陸道）と立山橋の架橋」

□事例報告

・県内報告 堀沢祐一（富山市教育委員会埋蔵文化財センター学芸員）

「越中国の律令祭祀と官衙遺跡」

・県外報告 望月精司（小松市教育委員会埋蔵文化財調査室主幹）「加賀地域の古代土器生産」

□特別講演 小林昌二（新潟大学人文学部教授）「北陸道越中国成立の前後」

□フォーラム「古代北陸の国と郡の成り立ち」

司会 吉岡康輔（石川県立歴史博物館長、国立歴史民俗博物館名誉教授）

講師 木本秀樹（富山市立奥田中学校教頭）

「八、九世紀越中国における神階奉授と各郡の在地勢力」

西井龍儀（富山考古学会副会長）「造瓦技法の画期—越中国分寺期の瓦—」

池野正男（富山県埋蔵文化財センター企画調整課長）

「越中における須恵器生産と流通」

小林昌二（新潟大学人文学部教授）

望月精司（小松市教育委員会埋蔵文化財調査室主幹）

堀沢祐一（富山市教育委員会埋蔵文化財センター学芸員）

今回のフォーラムは、古代律令国家を支えていた地方の国や郡、特に越中国について、その領域や変遷、地域性を明らかにしようとしました。なお、フォーラムに先立ち、杉村利一氏が浜黒崎から西水橋へ至る近世北陸道（往還道）、常願寺川への立山橋の架橋など水橋地区の地元紹介をされました。

特別講演では、新潟大学人文学部の小林昌二教授が「北陸道越中国成立の前後」と題して発表されました。これまでの古代史研究の蓄積を総括し、コシ国分割や変遷、国造制、対外関係など国の成



特別講演（小林昌二先生）

立にかかる諸問題や新潟県新潟市付近まで及ぶ広大な越中国の内容について詳細に分析されました。また、新潟県和島村八幡林遺跡から出土した「高志君」や越中の古代氏族「射水臣」と書かれた木簡にも触れ、越中国の痕跡が新潟県内に多くみられることを指摘されました。

また事例報告として、各講師の方々から文献史料、土器(須恵器)生産、瓦、律令祭祀などの観点からの報告がありました。

望月精司氏は、石川県加賀地域での土器生産システムの変遷に触れ、中央の政治状況と連動していること、厳しい生産管理に対し流通は郡域を越えて自由であったことを指摘されました。

池野正男氏は、富山県内の須恵器生産と流通、特に礪波郡での須恵器窯の変遷に触れ、胎土分析や肉眼観察によって製品の供給先や流通が分かるようになってきたことを報告されました。

木本秀樹氏は、『続日本紀』など文献史料にみられる神(神社)に位を与える制度(神階奉授)の検討によって、奉っている氏族の実力がうかがえ、越中国にあってはとりわけ礪波郡、射水郡の氏族の勢力が強いことを指摘されました。

西井龍儀氏は、富山県内における古代瓦の分布状況や製作技法の変化に目を向け、越中国では射水郡に集中し、当時の勢力分布のあらわであることを報告されました。

堀沢祐一氏は、富山市豊田大塚遺跡の人面墨書き土器、人形など富山県内の律令祭祀具を検討し、祭祀の主体者や目的の違いによって祭祀具のセット関係が異なることを指摘されました。また越中国の律令祭祀の特性や想定される官衙遺跡について検討されました。

事例報告をもとにした吉岡康暢先生の司会による「古代北陸の国と郡の成り立ち」についての



フォーラムの様子

第2回「奈良時代の龜山を探る」フォーラム 古代北陸の国と郡の成り立ち



フォーラムの様子

討論では、6人の講師陣により、文献史学や考古学の多様な視点から、国や郡の成立についてアプローチが行われました。

検討された内容は、国造の問題、国・郡境・条里など領域の問題、土器の物流、祭祀など多岐にわたり、会場内からも多数の意見や質問が出されるなど活発なフォーラムとなりました。

国や郡の境として山・川・峠が目印にされていること、潟湖を中心とする郡を越えたネットワークの存在が浮かび上がり、射水郡を

中心とした古代越中国の様相の一端をみることができましたが、さらに官衙、道路、製塙、製鉄など総合的な視点からの検討が必要であると課題が述べられました。近年、木簡資料も次々と見つかっており、今後の資料の増加に期待が寄せられる意見もありました。

国造検討の前段階として、6～7世紀の後期古墳が取りあげられましたが、その後の勢力につながる首長墳が明らかではなく、今後、横穴墓や群集墳の研究が必要とされました。また越中国の関係史料では、伊弥須国造1例しかなく、文献に出てこない他勢力の存在があるのではないかとも指摘されました。このような検討課題も出され、今後の研究につながる成果をあげることができました。

◎フォーラムに併せ、(財)水橋郷土史料館第3展示室において、関連企画展「水橋の遺跡物語II」が平成18年9月20日(木)から10月8日(月・祝)まで開催されました。



「水橋の遺跡物語II」展示の様子（水橋郷土史料館）

予告 第3回「奈良時代の富山を探る」フォーラム開催
第3回「奈良時代の富山を探る」フォーラムを下記の内容で開催予定しています。

日時：平成14年10月6日(日) 10:00～16:30

場所：水橋ふるさと会館

(富山市水橋館312、TEL076-478-0019)

◎フォーラム内容

テーマ：「(仮)古代越中国の瓦生産と仏教文化の浸透」

内 容：事例報告、特別講演、フォーラム等

◎関連企画展 (財)水橋郷土史料館

平成14年10月1日(火)～10月14日(月・祝)

お問い合わせ 富山市教育委員会 埋蔵文化財センターまで

発掘速報

●1号窯の全容解明、新たに炭窯3基検出

平成10年度に発掘調査を行った栃谷南遺跡では、奈良時代（約1,300年前）の瓦と須恵器窯2基を検出しました。今年度は、半分が未調査であった1号窯の発掘調査を行い、全容を明らかにしました。

1号窯は同じ場所で、4回にわたり窯の壁や床を造り変えて使われていました。灰原（焼成に失敗した品を捨てたところ）から大量に出土した瓦は、最初の窯で焼かれたことがわかりました。

最初の窯は丘の斜面を掘り窪め、その上に天井を架け、床面が緩やかに傾斜する登り窯として造られました。2回目以降は床がほぼ平らな窯に変更されました。このような床の平らな窯に天井を架ける須恵器窯は、北陸地方ではこれまでに見つかっていないタイプです。

窯の床下には除湿のために角庇状ピットと呼ばれる窪みを設けていました。2回目の窯では床下に須恵器の破片を3列に並べた排水施設を設けていました。焼成時に大敵となる窯内部の水の処理・除湿にはたいへん工夫を凝らしていたのです。

調査では約2,000箱、約20万点にものぼる大量の須恵器や瓦が出土したことから、他にいくつも窯があったと推定されています。しかし、2基の窯が壁や床を何度も補修しながら操業を繰り返したことにより、これだけ大量の失敗品が出たことがわかりました。

また、遺跡範囲を確認するための試掘確認調査を北側の水田で行いました。その結果、新たに炭窯を3基検出しました。鉄の製錬の際に用いる炭を焼く窯が複数存在することで、大規模な鉄の生産が行われていたことがわかります。

10年度の調査の際に検出していた地面が丸く焼けた場所2カ所は、その後の研究で土師器焼成遺構であることが明らかになりました。

以上のことから遺跡の中央を南北に伸びる谷の西側では、須恵器や瓦、土師器の焼成、製鍊、製錬といった生産活動がまとまって行われたことがわかりました。谷の東側には粘土採掘穴がいくつもあり、その粘土を窯の壁や天井、須恵器、瓦の材料としていたようです。

奈良時代の呂羽山丘陵西麓には須恵器窯が集中しています。栃谷南遺跡はそれらの窯からやや離れています。本遺跡の工人たちは瓦という特別な注文を受けてこの地で瓦窯を造り、引き続き須恵器の生産を行っていたと考えられます。出土品のなかには、仏教に関わる特殊な遺物や仏像をまねて作った須恵器もみられ、いまだ見つかっていない瓦の供給先を暗示しているかのようです。

出土した須恵器の蓋に、「惠^行」と文字が刻まれたものが1点あります。大伴家持^が越中国府に赴任していた頃、家持と一緒に歌を詠んだ講師僧^恵行^がが方菴集に登場し、本遺跡との関連性が注目されます。

栃谷南遺跡



1号窯全景（東から）



「惠^行」ヘラ文字

（鹿島昌也）

●古代から中世へ 集落の移り変わりが明らかに！ 金屋南遺跡

金屋南遺跡は富山市南西部にあり、呉羽山丘陵の東側、神通川支流の井田川に面する標高約11mの自然堤防上に立地します。

金屋企業団地造成に伴い、平成8年度から13年度まで約57,200m²を対象に発掘調査を行いました。遺跡は平安時代（約1,200～1,100年前）、鎌倉～室町時代（約900～600年前）を中心とした大規模集落で、中央部では区画溝により短冊状の居住域が形成され、集落の東部では川べりを利用した鋳物生産、西部と北部では畠を耕して食糧生産を行うなど計画的な集落構造がみられます。

これまでの調査で、鎌倉～室町時代の獨立柱建物50棟、区画溝、土坑1,000基余り、井戸40基、畠、河川跡、溶解炉、廐津場などを検出しました。廐津場では、鉄鍋や梵鐘の鋳型、三文状土製品、炉壁、炭、焼けた様などが大量に出土し、室町時代前半（約600年前）に鉄や銅製品の鋳物生産を行っていたことが明らかになりました。

東側の旧河川（旧井田川）からは、鏡や太刀飾りなどが入った銅製捷子が出土しました。付近の炉で鋳つぶして再鋳造するため、あるいは川を鎮めのためと考えられますが、一括した状態での出土は国内初の例であり、大きな話題となりました。

なお、文化庁主催の「発掘された日本列島2001～新発見考古速報展」に取り上げられ、平成13年6月から平成14年2月まで江戸東京博物館をはじめ全国6か所で巡回展示されました。

●平成13年度の発掘調査

遺跡の南部約9,600m²を調査しました。南西部では主に平安時代の遺構、南東部では鎌倉～室町時代の遺構を検出し、古代から中世への集落の移りわりが明らかになりました。

平安時代の集落

遺跡の南西部には平安時代の竪穴住居、土坑、河川跡（沼？）、畠などがあります。

竪穴住居は一辺約5mの方形のものが5軒あり、掘り込みは5～10cmと浅いものです。いずれの住居からも日常生活で使っていた土器類（須恵器の杯、蓋、壺、土師器の碗、甕）が出土しました。

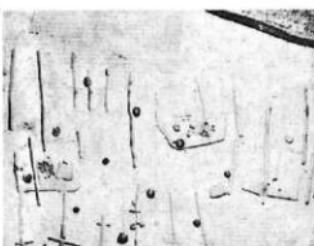
径1mほどの円形の土坑は30基ほどあり、うち1基からは土鍾や土師器が出土しました。土鍾は細長い管状のタイプのもので、20個以上が土坑の中にまとめて置かれています。

住居群西側で検出した河川跡は深さ1m以上で、砂と粘質シルトが交互に堆積しています。肩部には炭化物が集中して出土した地点があり、完全な形の土師器の椀が7個まとめて出土しました。椀の1つには朱書きで「北」と書かれており、旧井田川の氾濫を鎮めるため、あるいは川魚の豊漁祈願など祭祀の跡と考えられます。

一定の間隔で並ぶ畠の歴（溝）は、さまざまな方向の



南西部分の調査状況（北から）



平安時代の竪穴住居（東から）

ものがあり、長期（平安時代～鎌倉時代）にわたって耕作されていたことがわかりました。

鎌倉～室町時代の集落

遺跡の南東部から鎌倉～室町時代の掘立柱建物、天溝、井戸、土坑、ピットなどが多數見つかりました。造構の密集する部分とほとんどみられない部分が明確にわかれています。

掘立柱建物は15棟以上あり、大きさは8m×5m程の大型のものから1.5m×2.5mの小型のものまでさまざまです。総柱構造をした倉庫のようなものが多くみられます。建物の主軸方向や重複具合から3回位の時期変遷があったようです。

これらの建物群を大溝が取り巻いています。溝の断面は台形状で、幅3～4m、深さ1m以上あります。北東～南東方向に伸びて集落内を二分し、珠洲焼、中世土器類、大量の礫が出土しました。

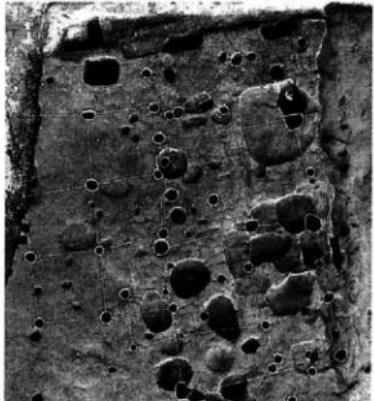
井戸には径2～4m、深さ2m以上の木組み井戸1基、石組み井戸2基があります。いずれも遺跡の東端に位置しており、地下の水脈を探し、地点を選びながら井戸をつくったようです。

木組み井戸は、角材で方形の枠を組み、外側に板材を立て並べたものです。井戸底には水を溜めるための曲物が置かれています。中から木製の下駄、織物（ざる状のもの）、板材、箸など木製品が多く出土しました。

石組み井戸は、いずれも人の頭ほど大きな河原石を幾段にも積んだもので、底部に方形の木枠を置いてありました。石の積み方を途中で変え、小振りの石で隙間を埋めるなど井戸づくりの工夫がみられます。また、石の間には河原石と一緒に五輪塔（地輪）を組み込んでいました。



南東部分の調査状況（南から）



鎌倉～室町時代の掘立柱建物（南から）



区画溝内の遺物出土状態（西から）

古代から中世へ 集落の移り変わり

これまでの調査から遺跡全体をみると、平安時代（1,200 年前頃）の堅穴住居は南西部で 10 軒存在し、平安時代の集落は小規模だったようです。また周辺の畠や大量の土錐の出土から、畠作と川魚漁を生業とした農村集落であったと考えられます。その後井田川の氾濫等によって、平安時代後期（約 1,100 年前頃）に集落は一端途絶えました。

鎌倉時代（約 900 年前頃）になると、この地で再び人々が生活を始めます。集落は北東側へ大きくなり、溝で区割りされた居住域を中心とした計画的なものとなります。

室町時代（約 600 年前）には、川べりで鋳物づくりを大がかりに行い、農村集落から鋳物生産地へ生業の様子も大きく変化したとみられます。

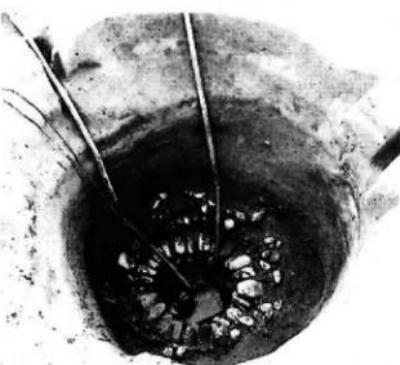
遺跡の東側には井田川が流れおり、物資の運搬など水上交通の便利な場所に位置しています。

周辺は醍醐寺文書「將軍足利義持寄進状」に記されている中世荘園「御腹荘」の領域に含まれ、室町幕府の直轄地となっていました。近隣の寺町地区には、室町時代に京都東福寺に関係する臨済禪宗の崇聖寺跡があつたと考えられています。

そのような食料、物資の供給地として重要な場所にあり、権力層や寺院と密接なつながりをもっていたとみられます。室町時代前半の鉄鍋や梵鐘などの鋳物生産も、荘園經營に関わる有力者の管理のもとで行われたと考え



木組み井戸内の遺物出土状態



石組み井戸



現地説明会の様子

られます。

このような発掘調査の成果について、平成 13 年 10 月 20 日(土)に現地説明会を開催しました。

当日は地元金屋地区の皆さんをはじめ、160 名を超える多くの参加者があり、高い関心をもって発掘調査地や出土品を見学していただきました。（小林高範）

●武将が熱中 すろくばん 水橋金広・かずはしかねひろ 中馬場遺跡 なかばんじせき

水橋金広・中馬場遺跡は、富山市北東部の水橋地区に位置します。これまでの調査で、若主子塚古墳（直径 46m の円墳）・宮塚古墳の北側に鎌倉時代～江戸時代前期にかけての館、集落を検出していました。

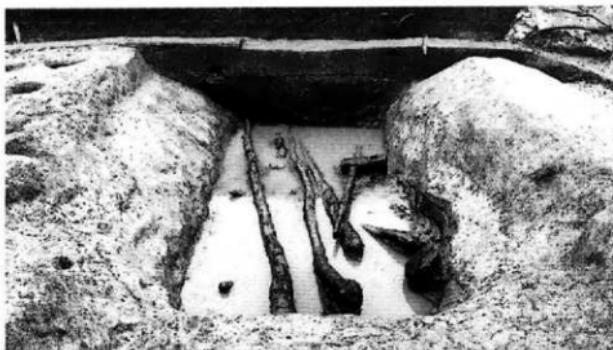
双六盤が使われた安土桃山時代までは、堀によって区画された屋敷地内に掘立柱建物や井戸を配置した館が築かれていました。江戸時代に入ると、一変して農業や川魚漁を生活の中心にした集落に変わります。

遺跡の南方 2km には、室町幕府管領細川氏一族の細川曾十郎が所領を得て築いたとされる仏生寺城跡があり、中馬場の地名は白岩川対岸のここに馬場を設けたことによると伝えられています。また、安土桃山時代（天正年間）には本遺跡の北方 2km に小出城が築かれます。この城跡は、富山城に換る織田信長の佐々成政が魚津市の松倉城跡まで侵攻してきた越後の上杉景勝勢に対峙してつくられた最前線基地でした。本遺跡は、これら室町～安土桃山時代の歴史上の舞台となった城郭のほぼ中間地に位置しており、深い堀に囲まれた防御的な性格をもつ館として、当時の社会情勢に深いつながりをもってこの地に位置していたと考えられます。

戦国時代の動乱が終わった頃、双六盤は方形竪穴状造構に捨てられました。当地から館の主が姿を消したのと同じくして、その役目を終え、廃棄されたものと思われます。その



調査区遠景（北から）



双六盤が出土した遺構（東から）

後、本遺跡は加賀領の農村集落へ変化していくことから、当地域の変遷を反映した遺物として重要な意義があります。

双六盤は一般的に盤面を削ったりして他の用途に再利用されることが多く、遺跡から出土することは大変稀です。これまで、神奈川県鎌倉市に所在する鎌倉時代末の伝北条時房・頼時跡（約 700 年前）の箱型双六盤の一部が確認されているのみです。

双六は、さいころの目によって様々な場面展開があり、熱中しすぎて賭け事に用いられることが多く、古代から中世にかけて何度も禁止令が出されました。一方で、武士の娘の嫁入り道具として用いられたり、『巣鴨草子』には出産の場面に双六盤が登場します。本遺跡の双六盤を所有していた館の主はどのような時に双六に興じていたのでしょうか。

（鹿島昌也）

●縄文時代と古代の拠点集落 開ヶ丘地内の遺跡群

開ヶ丘地区は富山市の南西部、射水丘陵の東端部に位置し標高 50~75mの丘陵上にあります。県営畑地帯総合整備事業に伴う調査で、縄文時代中期の集落や奈良~平安時代の集落・炭窯が数多く確認されました。

平成 13 年度は 6 遺跡の発掘調査（開ヶ丘中山Ⅲ・開ヶ丘中山Ⅳ・開ヶ丘中・開ヶ丘中山Ⅴ・開ヶ丘中山Ⅰ・開ヶ丘狐谷遺跡）を行いました。

●開ヶ丘の縄文集落 開ヶ丘中山Ⅲ遺跡

開ヶ丘中山Ⅲ遺跡は、平地との比高 30m の丘陵上にあります。調査では縄文時代中期前葉～中葉（約 5,000~4,500 年前）

の竪穴住居 6 軒、土坑 9 基などが検出されました。

第 2~6 号住居は中期前葉葉の住居で長さ約 6m の楕円形をしています。第 2・3 号住居には地面を浅く掘った炉（地床炉）がありました。

第 3 号住居には 2 基の地床炉とその直線上にロート状ピットと呼ばれる祭祀用の特殊な土坑が認められました。

第 4 号住居には石を四角に組んだ小型の石組炉が伴います。炉の型式はちょうどこの頃、地床炉から石組炉に変化します。第 4 号住居の石組炉はその最初の頃のものと思われます。中期中葉の第 1 号住居は一辺が 2.5m の隅丸方形で、県内では最も小さな住居の一つです。4 本の主柱と 2 本の棟持柱で骨組みをつくり、中央には大きな四角い石組炉（80cm×60cm）があります。この炉は途中でひとまわり小さいものの（50×40cm）に造り替えられています。石組炉の中には土器片が敷き詰められていました。これは、温度を上がりやすくし、効率よく熱を利用するための工夫と思われます。この炉の中と柱穴からは炭化した小さなクリ（長さ 1.5 cm 程）がみつかりました。

この頃の一般的な竪穴住居の面積は 15 m² 程ですが、第 1 号住居はその半分位の大きさしかありません。このような狭い住居で日常的に生活していたとは考えにくく、出産の際の産小屋として、あるいは儀礼の為に一時的に使用し



第 1~第 3 号竪穴住居（南から）



第 1 号竪穴住居（南から）

たという説もあります。

第1号住居からはたくさんの土器や磨製石斧・石鎚などが出土しました。また第4号住居の土坑からは新崎式と呼ばれる型式の土器(深鉢)が横倒しになって潰れた状態で出土しています。これらの多くは住居が廃絶された後まもなく凹地になったところに、次の世代の人々がゴミとして捨てたものです。

住居は平野部を見下ろす台地の先端部の約80m四方にまとまっています。試掘確認調査の結果では集落の中央部にも住居が存在することがわかっています。

遺跡からは中期後葉(4,000年前)の串田新式土器も出土しており、遺跡はその頃まで存続していたとみられますが、住居などの構造は発見されていません。

このような長期にわたる定住生活を支えたのが、石鍬や磨石類が示す川魚漁や堅果類の処理などの生業であったと思われます。

遺跡の周囲2kmには、開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡・池多東遺跡・北押川C遺跡・平岡遺跡といった縄文時代の遺跡が17ヶ所あります。丘陵上にある本遺跡は周辺の集落の中でも大きな集落であり、丘陵を下りた扇状地部分には小規模な集落が営まれていたようです。

今回検出した住居に重なって、狩猟用とみられる深さ50~70cmの小型の落し穴2基が検出されました。集落が廃絶したあとは、野に戻り狩猟の場となったとみられます。(山崎美和)

●山寺を祭る工人の拠点集落 開ヶ丘中遺跡

開ヶ丘中遺跡は開ヶ丘のほぼ中央に位置しています。丘陵の東斜面中腹にある帯状の狭い平坦地に奈良へ平安時代(約1,200~1,100年前)にかけての掘立柱建物9棟、礎石建物1棟、竪穴住居31軒、土師器焼成遺構2基などが密集していました。

掘立柱建物と礎石建物は丘陵斜面を削って平坦に整地した部分に建てられていました。礎石建物は雨落ち溝(排水溝)を伴い、一番大きな掘立柱建物(5.3m×7.6m)とともに集落の奥まった所にありました。

仏塔の屋根にとりつける
相輪や瓦塔といった仏具、
仏器をまねた鉄鋤形須恵器、
漆紙、「田」と線刻された石、
転用硯などがこの礎石建物
の周囲から出土しており、



縄文土器が出土した土坑(第4号住居; 西から)

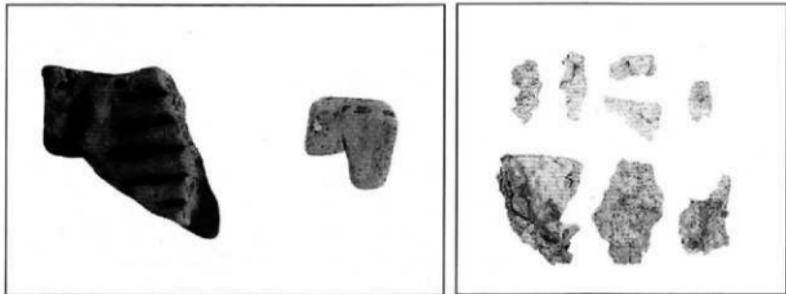


掘立柱建物と礎石建物(東から)

小規模な山寺であったと想定されます。須恵賀の相輪は丸輪の一部で、実際に仏塔の屋根に使用されたものと考えられます。瓦塔は屋蓋（屋根の部分）と斗拱（軒下にあり、斗と肘木などの部材を組み合わせた部分）が出土しました。屋蓋部分は本遺跡から東へ1kmにある向野池遺跡のものと同様の型式であることから、本遺跡と深い関連性があると考えられます。

竪穴住居は、掘立柱建物・礎石建物（山寺）が廃絶した後に建てられており、丘陵周辺の工人たちが居住地として使用したと考えられます。各住居は密集して所在し、何度も建て替えられたことが確認されました。

（近藤頭子）



瓦塔（左：屋蓋、右：斗拱）

漆 紙

●製鉄用炭焼きのムラ 開ヶ丘中山V遺跡・開ヶ丘中山I遺跡・開ヶ丘中山IV遺跡

奈良・平安時代の射水丘陵一帯は製陶・製鉄などの生産地帯であり、その東端に位置する開ヶ丘でも多くの遺跡が確認されています。

開ヶ丘中山V遺跡には奈良時代（約1,250年前）の炭窯が2基あります。全長約10m、幅1.2m、深さ0.7mの半地下式の炭窯で、わずかな傾斜地を利用して窯を造っています。焚口（窯の入り口）の前には作業場を深く掘り込んで作っており、緩傾斜地で窯を造るための工夫と考えられます。

開ヶ丘中山V遺跡から東へ300m離れた開ヶ丘中山I遺跡にも半地下式の炭窯が1基あります。平安時代（約1,200年前）に操業されたもので窯を造るために粘土を採集した粘土採掘穴が窯のすぐ隣りに掘られています。これらの炭窯は丘陵周辺に所在する製鉄遺跡（御坊山遺跡など）との関連が考えられます。

開ヶ丘中山IV遺跡には3基の平窯型式の炭窯があります。4m×2mの楕円形のもの2基と2.6m×1.7mの長方形のものがあり、深さは15～20cmと浅いものです。中央の溝は煙道、西側の張り出しが焚口、東側は煙出しと考えられます。これは中世～近世の状焼法による簡易な炭窯とみられます。



炭窯と粘土採掘穴（開ヶ丘中山I遺跡；北から）

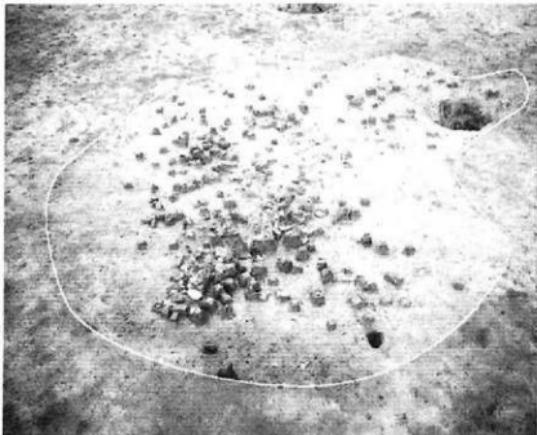
●縄文時代前期の竪穴住居と落し穴？群 北押川C遺跡

北押川C遺跡は、富山市の南西部、呉羽山丘陵と射水丘陵の間に位置します。

遺跡からは縄文時代前期後葉～末葉（約5,000年前）の竪穴住居1軒、土坑1基、古代（約1,200～1,300年前）の焼壁土坑14基などが見つかりました。

竪穴住居は楕円形をしており、長径6.6m、短径5.2mの大きさで、深さが20cmありました。住居の中に炉や柱穴は確認されませんでした。

ただし、住居の北西部が張り出しており、入口ではないかと考えられます。



縄文時代前期の竪穴住居（右上の張り出しが入口？；東から）

住居内からは廃絶後に捨てられた縄文土器や磨製石斧、磨石などが出土しています。

竪穴住居と重なるようにして、ほぼ直線に並ぶ、落し穴と考えられる土坑が7基見つかりました。落し穴はイノシシなどの動物を捕獲するためのものです。穴の底には、動物の動きを止めるために棒を立てる小穴があるものとないものがあります。本遺跡では、平面形が楕円形や隅丸方形で、長軸1～1.6m、短軸0.8～1.2m、深さは約1mです。底は平坦で、小穴はありません。並んでいる土坑の間隔は狭いところで約2.5m、広いところで約6.5mになります。

本遺跡の南方500mに位置する縄文時代晩期の野下遺跡（約3,000年前）でも、平面形が円形・楕円形・隅丸長方形の土坑8基が約7.5mにわたって一列に並び、落し穴とされています。大きいもので長軸1m、短軸0.8m、深さ1.65mになります。

野下遺跡の落し穴も本遺跡と同様に土坑の底部に小穴はありません。

小穴をもたない落し穴は底に穴を開けて棒を立てる仕掛けではなく、別の場所で、棒を縦横に組んだような仕掛けをつくってから底に設置したのではないかと考えられています。

当時の人々はどのような動物を捕まえていたのでしょうか。

（堀沢祐一）



落し穴？（西から）

●富山市南部の縄文集落 吉岡遺跡

吉岡遺跡は富山市の南部、熊野川の右岸に位置しています。縄文時代晩期末（約2,300年前）～室町時代（約500年前）までの集落遺跡です。

縄文時代晩期の集落は川べりに営まれており、住居の石組炉2基、配石（意図的に石を並べたもの）2基、土坑3基などが見つかりました。

1号石組炉は方形で、1辺が約90cmの大きさになります。各辺には4～5個の河原石が使われておらず、地面に突き刺すようにして配置されていました。炉の中央部分には、厚さ約5mmの焼けた土が堆積していました。

2号石組炉は円形で、直径80cmの大きさになります。1号炉とは直線距離で約9m離れています。炉石も1号炉と同様に、河原石を用いて、地面に突き刺すように配置されています。炉の中央部分に厚さ約5mmの焼けた土が堆積していました。これらの炉の周辺に住居の柱穴は確認できませんでした。

2号石組炉の北側に2基の配石があります。1号配石は長軸1.2m、短軸50cmの大きさで、長方形に河原石が配置されています。2号配石は形がはっきりしません。共に、石の平たい面を上に向けています。

住居の炉の中やその周辺には、大量の縄文土器や打製石斧・磨製石斧・石鎌・石皿・磨石・凹石などが出土しました。石斧は未製品が多く、ここで石斧づくりを行っていたようです。

周辺には、縄文時代晩期の集落がいくつか見られ、それらとの関係が注目されます。

平安時代（約1,200年前）になると、調査区の西側に竪穴住居4軒、掘立柱建物5棟、畠などがつくられます。

竪穴住居は一辺が約3mの方形で、カマドや通道をもつておらず、カマドの福部分には、石を埋め込んでいます。住居内からは土師器などが出土します。

掘立柱建物は隅丸方形の柱穴を有しており、2間×2間の總柱建物が1棟、2間×3間が3棟みつかっています。

そのうちの3棟は重なり合つ



縄文時代晩期の石組炉（1号石組炉；南から）



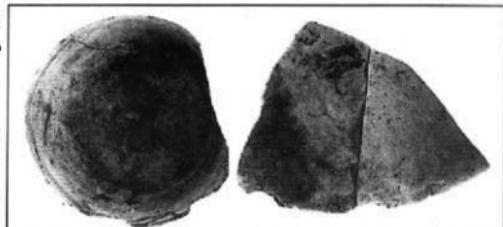
平安時代の竪穴住居（左側に見える石がカマドの袖石；北から）

ており、建物の建て替えが行われたことを示しています。同じ位置で何度も建て替えが認められることから、建物を建てる場所を決めていたようです。また、2間×2間の建物は食料などを保管した倉庫と考えられます。

畠は一部の竪穴住居や掘立柱建物が移転したあとにつくられています。調査区のほぼ全域に広がっています。畠の方角は一定ではなく、少なくとも4～5回のつくり替えが見られます。畠作が行われなくなつたあとは、再び掘立柱建物などがつくられることになります。

室町時代には、縄文時代の集落が土に埋まつた上に畠がつくられます。畠からは箸が約30本出土しました。畠から北西30～70mのところに掘立柱建物(2間×2間、2間×3間以上)が2棟見つかっています。室町時代になると、畠の範囲が狭くなるようです。

遺物では、平安時代の須恵器に「下山田口」と墨で書かれた土器が見つかっています。また、中世の土師器皿片の外側に馬?の絵が描かれたものも出土しています。



墨書き土器（左は「下山田口」と書かれたもの、右は馬？を描いたもの）

●室町時代の井戸が集中 経力遺跡

経力遺跡は吉岡遺跡の東側に位置しており、弥生時代中期(約2,000年前)～室町時代(約500年前)の集落です。弥生時代では、バナナ状、円形、竪穴状をした土坑が6基見つかりました。土坑の中からは弥生土器が出土しています。竪穴状の土坑は竪穴住居の可能性があります。

平安時代では、畠が見つかっています。竪穴住居などの建物跡は見つかっていません。

室町時代では、井戸7基、掘立柱建物1棟以上、溝などが見つかっています。井戸は石組み井戸が5基と素掘り井戸が2基あります。石組み井戸は直径70～80cm、深さ60cmの大きさです。現在、湧水はありませんが、当時は水位が高く、地下水を汲むことができたのでしょうか。

井戸は調査区の東側に集中しており、周辺に建物があったことが推定されます。（堀沢祐一）



弥生時代の土坑（西から）



室町時代の石組み井戸（東から）

北代縄文広場第2期整備　縄文広場に「縄文食体験広場」完成！



平成11年4月29日にオープンした北代縄文広場は、縄文時代中期（今から約4,500年前）の土屋根住居の復原など特色ある整備で知られています。開園以来すでに入場者数は3万人（年間平均1万人）を超えており、多くの市民や研究者の皆様に親しまれてきました。

このたび、さらに施設の充実をはかるために、隣接地を購入して、平成13～14年度の2ヶ年計画で第2期の整備を行っています。平成13年度は広場の北側の湧水地周辺一帯を、「調理加工の広場」として整備しました。

湧水地の東側には、炊事場と物置を設置しました。炊事場のなかには、野外炉と水場、縄文人が身近に用いたクリの木でつくったテーブルを置き、簡単な鍋物やバーベキューを行うことができるようになりました。

また、西側には縄文畑と調理体験コーナーを設けました。縄文畑ではソバやヒエなどを栽培し、縄文時代の食べ物の育成体験を行いたいと考えています。調理体験コーナーには、やはりクリの木でつくったテーブルやイスを配置してみました。

縄文畑からの収穫物を、調理体験コーナーで粉にし、だんごにしたあと、炊事場のなかで煮たり、焼いたりすることができます。みなさんも一度「縄文時代の食体験」をしてみませんか。

さらに、平成14年度には、広場の東側に隣接地を購入して、芝生広場として整備し、これまでの広場と一帯的に活用できる場とする予定です。

市民の皆様には、一層の御利用をしていただき、親しまれたいと思っています。
(堀沢祐一)



「調理加工の広場」
～右奥に見える三角屋根は
北代縄文館～



野外炉、水場、テーブル
を設けた炊事場

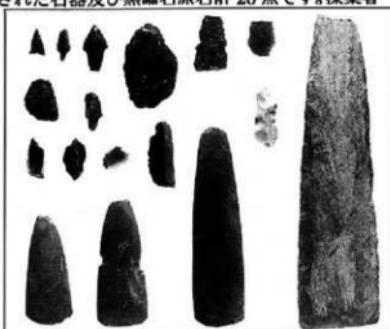


寄贈資料（貴重な資料を4件寄贈いただきました。）

1. 浦山尚武氏（富山市松若町）より 北海道名寄市日進遺跡出土品

縄文時代の遺跡として知られる日進遺跡で採集された石器及び黒曜石原石計20点です。採集者は名寄市日進の鈴木盛男氏です。

寄贈資料には、旧石器時代の彫刻刀形石器1点、縄文時代の石鏃3点・尖頭器3点・削器3点・搔器1点・剥片2点・磨製石4点（うち未成品1点）・砥石2点・黒曜石原石1点があり、剥片石器・原石はすべて黒曜石です。望月明彦氏（沼津高専）による原産地分析の結果、遺跡付近に所在する原産地（名寄布川）のものが3点、白滝8号沢（北海道白滝村）のものが1点確認されました。



2. 友仙寺（富山市百塚）より 伝富山市八ヶ山遺跡出土品

縄文～弥生時代の八ヶ山遺跡（市遺跡番号191）より採集されたと伝えられる縄文時代前期末から晩期の土器、縄文時代の打製石斧、中世の珠洲焼、瓦質陶器など計34点があります。

縄文土器のうち2点は、東北地方北部を中心に広がる縄文時代前期末の円筒下層d式土器です（鈴木克彦氏ご教示による）。東北北部の円筒式土器が県内で発見された例は初めてとみられます。



3. 植原利一氏（富山市栗山）より 伝富山市栗山塚付近出土品

中世～近世の栗山塚付近から出土した完形の珠洲焼の壺です。所蔵されていたのは植原利晴氏です。

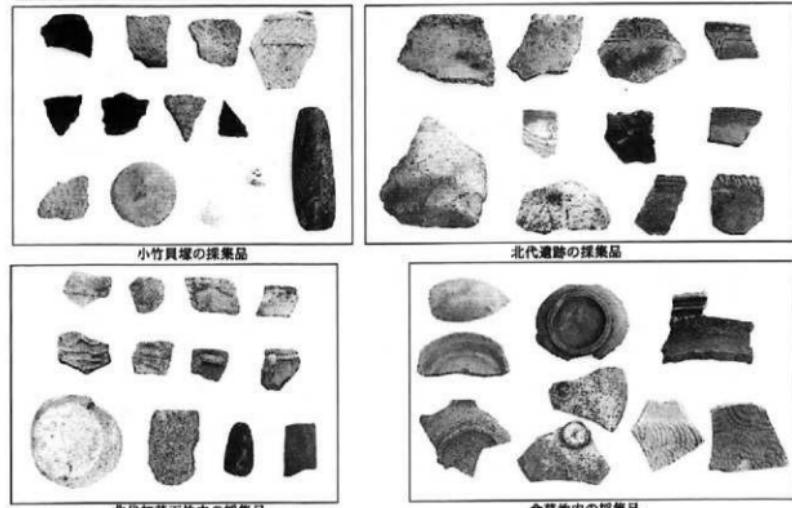
口径16.5cm、高さ38.6cm、胴部径31.2cm、底部径10.9cmの大きさがあります。鎌倉時代頃に石川県珠洲市の地で製作されたものです。

富山市教育委員会が1987年に刊行した『昭和61年度富山市埋蔵文化財調査概要』に写真が紹介されています。



4. 金岩 耕氏（富山市住吉）より 富山市北代遺跡・金草地内などの出土品
 約 20 年前に富山市内 10 か所及び県内各地で採集された縄文土器、石器、須恵器、土師器など 2,222 点があります。北代遺跡、小竹貝塚、北代加茂下地内などで採集された縄文土器、石器（縄文時代前期～晚期、特に中期～後期にかけてのものが多い）が大半です。

探集場所	種類（数量）	時代
富山市	北代遺跡 縄文土器(247)、打製石斧(1)、磨製石斧(1)、叩石(1)、石棒(1)、須恵器(30)、土師器(7)、珠洲焼(2)、越中瀬戸(3)	縄文（中～後期）、奈良、中世、近世
	小竹貝塚 縄文土器(190)、磨製石斧(1)、須恵器(1)、土師器(17)、珠洲焼(4)、骨片(2)、貝(14)	縄文（前期）、奈良、中世
	北代加茂下地内 縄文土器(983)、打製石斧(1)、磨製石斧(1)	縄文（中～晚期）
	金草地内 須恵器(287)、土師器(2)	白鳳～奈良
	中老田W遺跡 土師器(10)	奈良～平安
	八ヶ山地内 須恵器(31)、土師器(13)	奈良～平安
	平岡地内 須恵器(22)、土師器(1)	奈良
	百塚地内 須恵器(2)、土師器(3)	平安
	安養坊地内 土師器(35)	平安
	古沢地内 須恵器(1)、土師器(1)	奈良
入善町	吉原地内 縄文土器(1)、須恵器(6)、土師器(2)、土錐(1)、珠洲焼(1)	縄文、平安、中世
	下山地内 縄文土器(13)、磨製石斧(1)、須恵器(1)、土師器(5)	縄文（中期）、平安
	朝日町不動堂地内 須恵器(6)、土師器(5)	平安
	宇奈月町愛本新地内 垂飾品(1)	縄文
	魚津市印田地内 土師器(2)	奈良
	滑川市本江地内 縄文土器(221)、打製石斧(1)、須恵器(2)	縄文（中～後期）、奈良
	大門町生瀬寺地内 縄文土器(8)、須恵器(12)、土師器(1)、越中瀬戸(6)	縄文、奈良、近世
	小杉町小杉丸山遺跡付近 須恵器(1)、土師器(4)	奈良
	出土地不明 打製石斧(2)、磨製石斧(4)	縄文



研究余話 I

穿孔具? それともロクロ具?

藤田富士夫

1. はじめに

弥生時代の石器に、「大型礫錐」と称されるものがある。大型の長手の自然砾を磨き面取りして整えたものの一端あるいは両端を錐部としたものである（蜂屋 1985）。大阪府池上・四ツ池遺跡から 8 点が出土している。

これと同形態の石器が、香港やマカオといった南シナ海域の遺跡から出土している。1998 年 11 月に香港中文大学の鄧聰教授のご案内でマカオ博物館を訪ねた際、展示品の「環礁石」（写真）を御一緒した和洋女子大学の寺村光晴名誉教授とともに観察する機会を得た。鄧教授は、マカオ黒沙遺跡（鄧 1996）で発掘された類品を水晶製の玦飾などの内孔を磨く「環礁石」と見ておられて、これまで中国各地での類品の集成を行っておられる（第 2 図）。この用途について、寺村先生は、確証はないが形状からして「ロクロ」のようなものではないだろうかとされた。あわせて弥生時代の穿孔具の中に類例があると指摘された。

その後、鄧教授は『珠海文物集萃』（2000 年）を著わして、中国のロクロ技術を総説された。その中で、「今では、環珠江口地区で出土の乳凸状の石器は、ロクロの可能性がある。環珠江口地区的ロクロは環玦飾の工房跡で常に発見される器物である。」とし、ロクロ具説を具体化された。

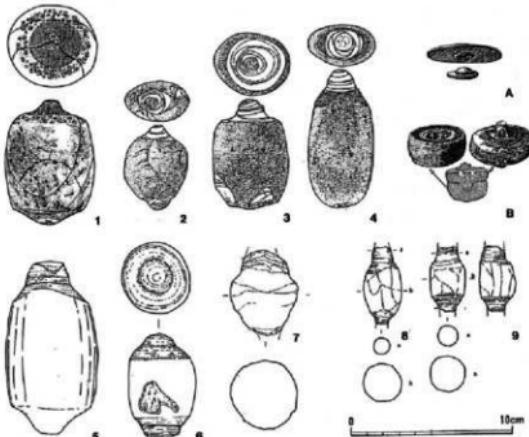
ここでは、日本の「大型礫錐」と、鄧教授が注目される「ロクロ具」研究の現状を概観する。

2. 大型礫錐の穿孔具説

「大型礫錐」は、大阪府の池上遺跡で「環状石斧用穿孔具」として報告されている（石神 1979）。そこでは 8 点が出土している。和泉砂岩などの棒状および円錐を素材としていて、長軸の一端もしくは両端に条線回転痕を有する凸部を有する。本遺跡では、未成品 2 点を含む計 8 点の環状石斧が出土しており、凸部径と石斧内径が合致することから環状石斧用穿孔具と見られている。

また、福岡県の石崎曲り田遺跡でも同種の石器が住居跡などから計 8 点出土しており（中間 1984）、中間研氏は当該品を穿孔具として、「磨製穿孔具集成」を行い（中間 1985）、1 類=先端が段をなし細くなる小型類

の定型化したもの、2 類=全体が自然石の棒状品を用いた大型品で回転磨痕もかなり径の大きい部位まで残るもの、3 類=小型細形で定型化しないが、弥生前期後葉～中期初頭というやや遅れた時期に残る類、に三分類している。「1・3 類は小径の石製穂摘具などの穿孔に、2 類は小径も穿孔に使用された可能性も有するものもあるが、大旨環状石斧等の穿孔に使用されたと考えられる」と用途に触れ、「環状石斧等の穿孔具」と



第 1 図 ロクロ具・穿孔具実測図（参考文献から引用作成）
(1. マカオ黒沙、2~4 珠海銀匙湾、5 大阪四ツ池、6 大阪池上、7~9 福岡曲り田、A イタリア Somaliland 木製製陶輪盤、B Fericho 石製製陶輪盤)

とされる池上・四ツ池遺跡例や、九州第2類は、いずれも九州第1類よりも時期的な後出性がみられ、環状石斧そのものの弥生期出現状況と一致するようである」としている。そして九州のそれを石製穂摘具などの石製品への穿孔具としている。

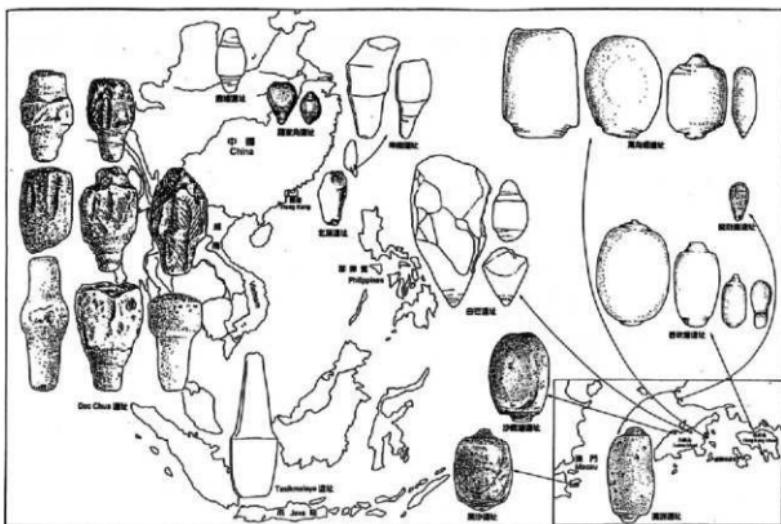
とりわけ2類のうちでも、いわゆる大型環錐に限れば、福岡県の石崎曲り田遺跡、大阪府の池上遺跡、同四ツ池遺跡から出土しているにすぎない。石崎曲り田遺跡は弥生早期の夜臼式住居跡から出土しており、池上・四ツ池遺跡は弥生中期の第III・IV様式に伴っているようである。

中間氏は、中国や韓国での穿孔具にも注目し、韓國大心里遺跡での大型品について、「環状石斧穿孔工具として最適の類である」としている。中国の西乾溝遺跡例は、「報告写真によると長さ8cm強で、両端使用の池上・四ツ池例に類似するものである。」と述べている。

3. 鄭教授によるロクロ具説

ロクロ具説は、前述したように寺村光晴先生により着目され鄭聰教授によって具体化された。鄭教授は当該石器の詳細な観察を行い、乳首凸は敲打で整形された後、回転運動によって光沢面が形成されたものとした。あわせて南シナ海域では、香港の龍鼓灘・白芒・湧浪・東湾遺跡、マカオの黒沙遺跡、珠海の寶鏡灣・鎖匙湾遺跡などでも「乳首凸輪轍」石器が出土しており(第2図)、いずれも環状飾の製作遺跡であることや、小林行雄氏の碧玉材攻玉に伴うロクロ使用研究(『古代の技術』塙書房 1982年)、中口裕氏のロクロを用いた石製品への穿孔実験(『実験考古学』雄山閣 1975年)、チャイルドの“Rotary Motion” A History of Technology, Vol. 1, 1958に記載されているイタリア Somaliland の木製回転盤(第1図A)や Fericho 石製回転盤(第1図B)の軸受けの形態などを援用してロクロ具説を提言している。

鄭氏は、約6,000年前の浙江羅家角遺跡や仰韶文化成都西乾溝遺跡で出土している類似品もロクロ具の可能性があるとしている。



第2図 東アジア地域の環状石（ロクロ具）分布図（鄭・鄭 1996 より転載）

4. おわりに

第1図に、南シナ海域と池上・四ツ池遺跡および石崎曲り田遺跡の類似品を掲載した。これらは形態や大きさも酷似している。南シナ海域のこれらの遺跡群は、約4,000年前の新石器時代晚期に比定されている。一方、弥生早期や中期は約2,400~2,000年前頃とされている。

中間氏は、「磨製穿孔具はまさに曲り田期以降の、言わば弥生的遺物として、縄文的様相と切り離し得る全く新しい要素を有する文化的遺物、と位置づけられる」とし、「明確な海外からの頭初期水田稲作文化に伴う、数少ない確実な文化要素である」(中間 1985年)としている。この指摘は示唆的である。日本列島の当該品が弥生遺跡一般に普遍的でなく、福岡県と大阪府の複点的遺跡でのみ検出されている現状からは、渡來的であるが限定的普及にとどまっているように思われる。

渡來のルートについては、中国大陆や半島からが想定されてきたが、南シナ海域に酷似する遺物が存在することから、彼地への注視は欠かせないものとなろう。当該品が、大きく南シナ海域との文化伝播によるものとすれば今日以上に重要な資料となる。

ただし彼我の間に横たわる大きな年代の違いやクロク貝説から列島の「大型環錐」の見直しが可能かどうか、あるいは「他人の空似」かの問題については今後の研究の進展に期待したい。ここに鄭聰先生のご研究の一端を紹介するとともに日頃の学恩にお礼を申しあげる次第である。



マカオ博物館展示の黒沙遺跡出土の環底石と環状飾（手前）

引用・参考文献

- 石神幸子 1979 「環状石斧用穿孔具」『池上遺跡 第3分冊の1 石器編』 財団法人大阪文化財センター
中間研志 1984 「穿孔具」『石崎曲り田遺跡-II-中巻』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第9集 福岡
県教育委員会
中間研志 1985 「磨製穿孔具集成」『石崎曲り田遺跡-III-』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集
福岡県教育委員会
蜂屋晴美 1985 「石錐」『弥生文化の研究 第5巻』 雄山閣出版
鄭聰・鄭焯明 1996 『澳門黑沙』 澳門基金会・中文大学出版会
李世源・鄭聰主編 2000 『珠海文物集萃』 香港中文大学中国考古藝術研究中心

富山市杉谷A遺跡小考～第10号方形周溝墓出土銅鏡をめぐって～

小黒智久

1. 遺跡と銅鏡

富山市杉谷A遺跡（富山市教委 1975）では、弥生時代終末期の墓域（方形周溝墓 17基、円形周溝墓 1基、土墳墓 2基）が確認されている。方形周溝墓は大型墓（一辺 10m程度）6基、小型墓（一辺 5m程度）11基であり、被葬者の階層差が埴丘規模や棺型式に表れている。ここでは、第10号方形周溝墓の割竹形木棺内出土有茎三角形銅鏡を検討する。なお、第10号方形周溝墓は一辺が 11m と群中最大規模を誇り、溝からは底部穿孔壺など多数の土器が出土している。

銅鏡は一部欠損するものの、長さ 3.0cm、最大幅 1.1cm、最大厚 0.6cm、重さ 1.9g である。古墳時代前期にも残るが、弥生時代後期～終末期に特徴的な形態である。富山県域での確認例は本資料と氷見市大境洞窟・朝日貝塚例のみである。本資料は、弥生時代終末期の石川県金沢市下安原海岸遺跡例（前田 1996）と形態や大きさが酷似している。

2. 北陸の製作地を考える

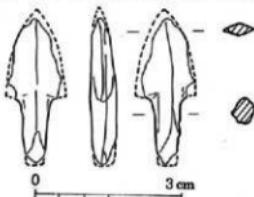
弥生時代後期前半の石川県小松市一針B遺跡では、堅穴住居から土製の鋳型外枠や鉢形土器（とりべ）が出土した。住居を工房として青銅器の鋳造作業が行われ、鋳型の大きさから、銅鏡や銅劍などを製作していたと推定されている（林 2001・荒木 2001）。石川県金沢市大友西遺跡（前田前掲）では、溝底部から銅鏡未製品が出土している。一針B遺跡の存在を考慮するなら、本例は遠隔地から流通品ではなく、当地周辺で製作された可能性もある。

石川県域では加賀地方に弥生時代銅鏡が集中する。これは、加賀地方で銅鏡が生産されていたことに起因するのではなかろうか。能登地方での確認例は羽咋市寺家遺跡例のみであり（前田前掲）、能登・越中地方と遠隔地になればなるほど入手困難だった状況がうかがえる。杉谷A遺跡例もまずは加賀地方で生産された可能性を想定すべきである。弥生時代銅鏡は古墳時代銅鏡ほど研磨されることなく、工人の癖を読み取ることは古墳時代銅鏡よりはるかに難しいが、詳細な型式学的検討と共に原料産地の推定データ（鉛同位体比法）の蓄積による原料比較が望まれる。

3. 今後の課題～井田川流域における王權形成過程の理解に向けて～

本遺跡からは銅鏡の他にも素環頭鉄刀や短劍、もしくは槍先、ヤリガンナ、鉄素材、ガラス小玉が出土している。この副葬品組成はほぼ同時期の福井市原目山墳墓群と類似しており、両者の関連性が注目される。鉄製品の入手契機・経路が類似していた可能性もある。素環頭鉄刀は第2号（小型墓）・第3号方形周溝墓（大型墓）から出土し、第3号方形周溝墓は第10号方形周溝墓とほぼ同規模である。隣接する王墓（杉谷4号墳・杉谷1番塚）との階層的位置関係や地域社会の発展過程を検討するため、今後は供獻土器の型式学的検討から方形周溝墓群の共時性の有無、あるいは先後関係を追究していく必要がある。本遺跡とほぼ同時期と考えられる杉谷4号墳の副葬品組成は不明であるが、杉谷4号墳の被葬者を盟主とする下位集団の墓域と目される本遺跡から素環頭鉄刀や銅鏡が出土したことは、杉谷4号墳や次代の杉谷1番塚（前方後方墳）の副葬品組成を示唆している。

（小黒智久）



杉谷A遺跡第10号方形周溝墓出土銅鏡

- 富山市教育委員会 1975 「富山市杉谷（A・G・H）遺跡発掘調査報告書」
 荒木麻理子 2001 「一針B・C遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第5号 財団法人 石川県埋蔵文化財センター
 林 大智 2001 「一針B遺跡と千代・能美遺跡について」『石川考古』第262号 石川考古学研究会
 前田雪恵 1996 「鏡鏡」『石川県考古資料調査・集成事業報告書 武器・武具・馬具I』 石川考古学研究会

平成13年度埋蔵文化財センター事業

1 埋蔵文化財調査

●発掘調査 開発に先立ち、遺跡を記録保存することなどを目的とした調査です(2月末現在)。

No	遺跡名	所在地	調査原因	面積(m ²)	時代	遺跡の種類
441	開ヶ丘中山Ⅲ	西押川	県営畠地帯総合整備事業	880	縄文中	集落
446	開ヶ丘中山Ⅰ	開ヶ丘	県営畠地帯総合整備事業	550	奈良、平安	炭窯
448	開ヶ丘中山Ⅳ	開ヶ丘	県営畠地帯総合整備事業	3,300	縄文中、平安、中世～近世	集落、炭窯、生產跡
449	開ヶ丘中	開ヶ丘	県営畠地帯総合整備事業	11,263	縄文、奈良～平安	集落、生産跡、社寺
457	開ヶ丘狐谷	開ヶ丘	県営畠地帯総合整備事業 (農道整備)	1,800	奈良	集落
460	御坊山	池多	ふるさと農道整備事業	329	奈良	炭窯、製鉄炉
465	池多東	北押川	市道改良事業	220	縄文中	集落、生産跡
466	北押川Ⅲ	平岡	県道改良事業	3,560	縄文中、古代	集落、生産跡
467	境野新南Ⅱ	境野新	市道改良事業	532	不明	生産跡
501	任海宮田	任海	個人住宅建築	42	平安	集落
524	経力	経力	住宅団地造成	995	弥生、平安、室町	集落
525	吉岡	吉岡	住宅団地造成	4,270	縄文晩、弥生、平安、戦国	集落
576	上布目	上布目	土砂採取	320	縄文晩、平安、鎌倉、室町	集落、墓
590	金屋南	金屋字川端	企業団地造成	9,600	平安、鎌倉～室町	集落、生産跡
601	開ヶ丘中山Ⅴ	北押川	県営畠地帯総合整備事業	90	奈良～平安	炭窯
計15件 調査面積 37,751 m ²						

●試掘確認調査 開発予定地内の遺跡の有無などを確認する調査です(2月末現在)。

No	遺跡名	所在地	調査原因	対象面積(m ²)	調査結果
10	今市	八町東	駐車場造成	1,522	溝(古墳) 土師器(古墳・平安)
10	今市	八町東	個人住宅建築	500	遺跡なし
23	水落西	米田	豊田小学校建設	31,047	遺跡なし
33	高来	浜黒崎	個人住宅建築	198	溝(奈良～平安) 縄文土器、須恵器、土師器、土鍬(奈良～平安)
36	浜黒崎悪地	浜黒崎	鉄塔建設	250	遺跡なし
44	水橋荒町・辻ヶ堂	水橋辻ヶ堂	個人住宅建築	469	遺跡なし
72	東老田Ⅰ	東老田	駐車場造成	245	遺跡なし
73	高木南	高木	分譲宅地造成	48,079	遺跡なし
109	八町Ⅱ	八町南、北代中部	県営農道整備事業	1,170	遺物包含層(縄文)、土坑、谷状通構、溝(古墳・室町) 縄文土器、鐵製石斧(縄文)、土師器(古墳・室町)、須恵器(平安)、珠洲、越前(室町)
160	奥羽富田町	北代	個人住宅建築	359	獨立柱建物、土坑(奈良)、縄文土器、土師器(奈良)、須恵器(平安)
174	北代南田渕	北代	分譲住宅地造成	5,000	遺跡なし
204	新屋殿田	新屋	個人住宅建築	500	遺跡なし
251	水橋金広・中馬場	水橋清水堂	県営農道整備事業	640戸	溝(弥生)、土坑、獨立柱建物、井戸、溝(室町) 弥生土器、須恵器(奈良)、土師器、珠洲(室町)
251	水橋金広・中馬場	水橋中馬場	市道改良事業	854	溝、土坑(弥生・中世～近世) 弥生土器、土師器、瀬戸(中世) ほか

256	水橋上砂子坂	水橋下砂子坂	産業廃棄物処理場建設	801	遺跡なし
283	柄谷南	柄谷	遺跡範囲内容確認	17,000	炭窯、溝、土坑、掘立柱建物（奈良）須恵器、土師器（奈良）
284	砂川カタダ	東老田	個人住宅建築	280	遺跡なし
354	杉谷北	杉谷	個人住宅建築	801	遺跡なし
397	富山城跡	桜木町	オフィスビル建築	826	遺跡なし
397	富山城跡	總曲輪	オフィスビル建築 (予定)	200	水田跡（室町）須恵器（古代）、土師器、珠洲（中世）ほか
441	開ヶ丘中山Ⅲ	西押川	県営畑地帯総合整備事業	8,900	柱穴、土坑、溝（縄文）繩文土器、磨製石斧（縄文）
447	開ヶ丘中山Ⅱ	開ヶ丘	県営畑地帯総合整備事業	7,000	遺跡なし
448	開ヶ丘中山Ⅳ	開ヶ丘	県営畑地帯総合整備事業	1,600	遺跡なし
449	開ヶ丘中	開ヶ丘	県営畑地帯総合整備事業	13,000	焼壁土坑、溝（平安）須恵器、土師器、鉄滓、土鍤（平安）
480	黒崎種田	黒崎	事務所建築	965	遺跡なし
481	八日町	黒崎	倉庫・事務所建築	661	遺跡なし
488	本郷椎木	本郷町	分譲宅地造成	4,025	土坑、溝（古墳）土師器（古墳）
513	上野井田	二俣	庭園建築	397	溝（奈良）土師器（奈良）
531	辰尾	辰尾	リサイクルセンター建設	4,566	遺跡なし
536	興国寺跡跡	布市	資材置場造成	500	壙跡（中世）土師器、鉄釘（中世）
587	金屋向田	寺町	個人住宅建築	377	溝、土坑（中世）土師器、美濃焼戸（中世）

計 81 件 調査対象面積 152,722 m²

内 証	区分	原 因		調査件数	
		道路	学校建設		
公共		農業基盤整備事業（農道等含む）		4	
民間		個人住宅		9	
その他建物（宿舎・公民館・消防施設・オフィスビル・寺社・病院）				4	
宅地造成				4	
ガス・電気・水道等				1	
その他開発（墓地造成・青空駐車場・資材置場・競技場・産廃処理場）				7	

●出土品整理 発掘調査で出土した遺物や図面を整理し、報告書にまとめる作業を行います。

遺跡名	時代	開発計画者等	事業名
向野池遺跡	平安	富山県（富山土木事務所）	主要地方道整備
水橋金広・中馬場遺跡	古墳・鎌倉～江戸	富山県（富山農地林務事務所）	県営農地整備
岩瀬天神遺跡	縄文～江戸	富山県（港湾課）	海岸整備
柄谷南遺跡	奈良	富山市（埋蔵文化財センター）	出土品整理
金屋南遺跡	平安・鎌倉～室町	富山市（企業立地推進室）	緊急雇用対策

2 北代縄文広場管理

北代縄文広場を市民に公開し、活用するため、管理運営を長岡校下自治振興会に委託しています。縄文広場ではさまざまな行事が行われ、また全国各地から多くの方が見学に来て下さいり、解説ボランティアの皆さんによるユーモアあふれる解説に耳を傾けていました。
(p.30-31 参照)

3 柄谷南遺跡調査・整備

富山市指定文化財柄谷南遺跡の整備に際して、遺跡範囲を正確に把握するための試掘確認調査(17,000 m²)と、瓦窯跡の構造や焼成回数、自然科学的データを得るための発掘調査(50 m²)を行いました。(p.5 参照)。

4 展示・普及

(1) 発掘速報展 2001

「先人たちの暮らしこと遊び」

平成 14 年 2 月 18 日～2 月 25 日

富山市役所 1 階多目的ホール

平成 14 年 2 月 27 日～3 月 31 日

富山市考古資料館



発掘速報展 2001 「先人たちの暮らしこと遊び」

(2) 現地説明会

開ヶ丘中山Ⅲ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・

開ヶ丘中遺跡

平成 13 年 7 月 7 日 見学者 80 名

金屋南遺跡 平成 13 年 11 月 23 日

見学者 160 名

開ヶ丘中遺跡 平成 13 年 11 月 23 日

見学者 50 名



開ヶ丘中山Ⅲ遺跡現地説明会

(3) 展示

奥田小学校ふるさと考古教材展示室第 6 回展示

「むかしの人は何を食べていたの？」展

教材展示期間 平成 13 年 4 月 4 日～10 月 26 日

一般公開期間 平成 13 年 5 月 10 日～8 月 9 日

展示内容 千原崎遺跡出土塊状炭化米など、

「食」をテーマとした展示

奥田小学校ふるさと考古教材展示室第 7 回展示

「むかしの人はどんな家に住んでいたの？」展

教材展示期間 平成 13 年 10 月 27 日～平成 14 年 3 月 31 日

一般公開期間 平成 13 年 12 月 6 日～平成 14 年 3 月 20 日

展示内容 発掘調査の成果をもとに、すまいの工夫をジオラマやパネルで解説

北代繩文広場富山市内遺跡発掘速報展示コーナー展示「北代遺跡発掘速報展」

会場 北代繩文館

会期 平成 13 年 4 月 26 日～平成 14 年 3 月 31 日

内容 平成 12 年度に発掘した北代遺跡出土品（岩版など）の展示

第 2 回奈良時代の富山を探るフォーラム関連企画展「水橋の遺跡物語Ⅱ」

会場 財団法人水橋郷土史料館 第 3 展示室

会期 平成 13 年 9 月 20 日～10 月 21 日

内容 水橋地区周辺 10 遺跡の出土品（水橋金広・中馬場遺跡出土線刻臼など）

富山市考古資料館特別展示「双六盤・水橋金広・中馬場遺跡出土品展示ー」

会場 富山市考古資料館

会期 平成 13 年 10 月 12 日～平成 14 年 2 月 26 日

内容 国内初の厚板状双六盤を速報展示

(4) 資料貸出

富山県企画部日本海政策課主催「富山の玉 ヒスイガラス展」

会場 富山国際会議場

会期 平成 13 年 3 月 31 日

貸出資料 清水堂南遺跡出土玉作関係資料、平村下梨地内のヒスイ製大珠など

魚津市教育委員会 魚津市歴史民俗博物館企画展「お金の世界」

会期 平成 13 年 5 月 8 日～6 月 24 日

貸出資料 上布目遺跡出土錢貨・調査写真

文化庁主催「発掘された日本列島 2001—新発見考古速報展ー」

会期 平成 13 年 6 月 12 日～平成 14 年 2 月 18 日

会場 東京都江戸東京博物館・栃木県小山市立博物館・愛知県田原町博物館・島根県立博物館・熊本県立装飾古墳館（山鹿市立博物館）・大阪歴史博物館

貸出資料 金屋南遺跡出土提子・鏡・太刀飾り・調査写真

魚津市教育委員会 魚津市歴史民俗博物館企画展「まじないの世界」

会期 平成 13 年 9 月 29 日～11 月 25 日

貸出資料 吾羽モグラ池遺跡・豊田大塚遺跡ほか出土品・調査写真

萩浦公民館文化祭特別展示「千原崎遺跡－江戸時代のむら－」

会期 平成 13年 11月 2日～12月 7日

貸出資料 千原崎遺跡出土塊状炭化米・越中瀬戸焼など

上条公民館まつり特別展示「水橋金広・中馬場遺跡出土品展示ー」

会期 平成 13年 11月 3日

貸出資料 水橋金広・中馬場遺跡出土品（厚板状双六盤など）

富山市岩瀬・水橋バイ船フォーラム 2001 特別展示

会場 富山市萩浦公民館

会期 平成 13年 11月 11日

貸出資料 千原崎遺跡・四方北窓遺跡・四方荒屋遺跡などの出土品

青森県立郷土館特別展「火炎土器と翡翠の大珠」

会期 平成 13年 11月 16日～12月 16日

貸出資料 史跡北代遺跡のヒスイ原石・玉未製品、平村下梨地内のヒスイ製大珠など

萩浦小学校特別展示「千原崎遺跡－江戸時代のむら－」

会期 平成 13年 12月 7日～平成 14年 3月 31日

貸出資料 千原崎遺跡出土塊状炭化米・越中瀬戸焼など

上条公民館市民講座文化財講演会特別展示『『広報とやま』に登場した出土品展』

会期 平成 14年 2月 21日

貸出資料 浜黒崎野田・平櫻遺跡、任海宮田遺跡、米田大覚遺跡、柄谷南遺跡などの出土品

富山県・富山市・社団法人富山県計量協会主催「富山計測展」

会場 富山産業展示館

会期 平成 14年 3月 14日～3月 15日

貸出資料 富山市水橋金広・中馬場遺跡出土厚板状双六盤

(5) 講演・研究発表

富山大学附属小学校 6年 1組総合学習 平成 13年 5月 23日

藤田富士夫 「伝えよう 21世紀へのメッセージー呉羽山が語る日本の歴史の巻ー」

第32回文化財保存全国協議会佐賀大会 平成 13年 5月 27日

古川知明 「富山市北代遺跡の史跡整備」

富山市社会福祉協議会「ふるさと探訪講座」 平成 13年 6月 7日

鹿島昌也 「富山平野の王堆—古墳と埴輪ー」

富山市社会福祉協議会「ふるさと探訪講座」バスター 平成 13年 6月 8日

鹿島昌也・安達志津 「現地探訪 古代の富山」

金屋南遺跡・杉谷 4号墳（富山市）、柳田布尾山古墳（水見市）、桜谷古墳群（高岡市）

五福小学校文化財教室 平成 13年 6月 21日

藤田富士夫 文化財教室「五福の遺跡」

奥田枝下ふるさとづくり推進協議会 平成 13年 7月 25日

藤田富士夫 奥田ふるさと講座「縄文人の知恵と技術」

大谷美術学園 2001 世界の児童画フェスティバル 平成 13年 8月 5日

鹿島昌也 「テラコッタで埴輪を作ろう！」

文化庁・兵庫県教育委員会主催平成 13年度埋蔵文化財担当職員等講習会

平成 13年 9月 6～7日 兵庫県神戸市

藤田富士夫 「富山市における埋蔵文化財行政の現状と課題」

富山市水橋北馬場公民館円融会 平成 13年 8月 19日

鹿島昌也 「三ヶ官周辺調査から推測されるもの」

婦中町ほか主催「2001 弥生ミニシンポジウム in 婦中 卑弥呼の時代を生きた人々」

平成 13年 9月 22日

藤田富士夫 バネリスト参加

第2回「奈良時代の富山を探る」フォーラム 平成 13年 9月 30日

堀沢祐一 「越中国の律令祭祀と官衙遺跡」

第32回東海北陸社会教育研究大会 平成 13年 10月 5日

古川知明 「富山市北代縄文広場におけるボランティア活動の現状」

富山市社会福祉事業団職員研修 平成 13年 10月 30日

藤田富士夫 「卑弥呼時代の富山」

吳羽中学校地域教養講座 平成 13年 11月 2日

藤田富士夫 「卑弥呼時代の呉羽山」

- 富山市上条公民館まつり 平成 13 年 11 月 3 日
 鹿島昌也 「武将が熱中・双六盤」
- 富山市岩瀬・水橋バイ船フォーラム 2001 平成 13 年 11 月 11 日
 古川知明 「越中岩瀬湊周辺の考古学的調査から」
- とやま同人誌会文学シンポジウム 平成 13 年 11 月 25 日
 藤田富士夫 「女王卑弥呼と富山」
- 等・尺八演奏と富山の歴史古代へのいざない 平成 13 年 12 月 22 日
 堀沢祐一 「古代人のいのりへ人の顔が書かれた土器の謎」
- 北国新聞文化センター「ふるさと学—石川県って、こんなとこ」 平成 14 年 1 月 12 日
 藤田富士夫 「真脇の縄文人はイルカを食べた?」「能登にあった日本最古のおにぎり」
- 文化庁・埼玉県教育委員会主催平成 13 年度埋蔵文化財担当職員等講習会
 平成 14 年 1 月 17~18 日 埼玉県さいたま市
- 藤田富士夫 「富山市における埋蔵文化財行政の現状と課題」
- 富山考古学会総会調査発表 平成 14 年 1 月 27 日
 鹿島昌也 「富山市水橋金広・中馬場遺跡出土の双六盤について」
- 富山県高等学校教育研究会地歴部会 2 月例会 平成 14 年 2 月 5 日
 藤田富士夫 「邪馬台国と婦負王国」
- 富山市上条公民館市民講座文化財講演会 平成 14 年 2 月 21 日
 藤田富士夫 「奈良時代東大寺の莊園が上条にあった?」

(6) 講座・冊子連載・ラジオ出演

●富山市民大学 市民の考古学「縄文再発見」

回	月 日	講 座 題 目	講 師
1	5 / 11	縄文化のはじまりーアジアの中の縄文文化ー	藤田所長
2	5 / 25	縄文ネットワークーヒスイの道ー	藤田所長
3	6 / 8	巨大記念物の謎ー環状(?)木柱列などー	藤田所長
4	6 / 22	縄文人の道具①ー土器の世界ー	小林学芸員
5	7 / 13	縄文人の道具②ー石器の世界ー	小林学芸員
6	9 / 14	縄文人の食料事情ー貝塚は語るー	小林学芸員
7	9 / 28	縄文人のすまいと技術	古川主任学芸員
8	10 / 12	現地学習(富山市北代縄文広場)	古川主任学芸員
9	10 / 26	縄文人の装身具	堀沢学芸員
10	11 / 9	縄文人の精神世界	堀沢学芸員

●富山市日本海文化研究所公開講座「島と半島の日本海文化」

回	月 日	講 座 題 目	講 師
1	4 / 24	島と半島の視点から	藤田所長
9	12 / 21	島をめぐる祭祀文化	堀沢学芸員
10	1 / 29	佐渡ー島の考古学ー	古川主任学芸員



第 1 回公開講座（講師：藤田所長）



第 10 回公開講座（講師：古川主任学芸員）

●『広報とやま』連載「とやま遺跡ものがたり」①～⑫

回	掲載号	掲載題目	執筆者
①	4・5 (1203) 号	発掘調査を行うまで	藤田所長
②	5・5 (1205) 号	北代遺跡の土屋根住居	古川主任学芸員
③	6・5 (1207) 号	縄文時代の浜黒崎	小林学芸員
④	7・5 (1209) 号	白岩川流域の古墳群	鹿島学芸員
⑤	8・5 (1211) 号	任海宮田遺跡の墨書き土器と石帶	堀沢学芸員
⑥	9・5 (1213) 号	古代の役所跡か?米田大覚遺跡	小林学芸員
⑦	10・5 (1215) 号	柄谷南遺跡の瓦づくり	鹿島学芸員
⑧	11・5 (1217) 号	古代の水橋駅か 水橋荒町・辻ヶ堂遺跡	小林学芸員
⑨	12・5 (1219) 号	豊田大塚遺跡の人面墨書き土器と人形	堀沢学芸員
⑩	1・5 (1221) 号	今年は午年～馬の考古学～	近藤学芸員
⑪	2・5 (1223) 号	鉢物づくりのムラ～金屋南遺跡～	小黒学芸員
⑫	3・5 (1225) 号	縄文人の骨角器づくり	原田学芸員

●『観光とやま』連載「大地の語り」⑤～⑧ 富山市観光協会

回	掲載号	掲載題目	執筆者
5	83号 (4/10)	畠暮を楽しむ戦国の兵	藤田所長
6	84号 (7/10)	酒と鏡と刀	藤田所長
7	85号 (10/10)	陰陽師・富山城を守る	藤田所長
8	86号 (1/10)	最多の瓦生産・馬への願い	藤田所長

●とやまシティエフエム出演

放送日	番組名	主題	出演者
5/28	ハートフルティ	千原崎遺跡出土土塊状炭化米について	小黒学芸員
9/17	飛び出す広報	第2回「奈良時代の富山を探る」フォーラムの開催について	小林学芸員
10/15	飛び出す広報	金屋南遺跡現地説明会の開催について	小黒学芸員
11/25	二人でお茶を	埋蔵文化財センターの活動と富山平野の遺跡について	鹿島学芸員

(7) その他

① 社会に学ぶ14歳の挑戦

出土品整理・金屋南遺跡発掘調査業務の体験

奥田中学校(参加者2名)

平成18年6月18日～6月22日

東部中学校(参加者2名)

平成18年6月19日～6月25日

新庄中学校(参加者2名)

平成18年7月2日～7月6日

堀川中学校(参加者2名)

平成18年7月2日～7月6日

北部中学校(参加者2名)

平成18年10月1日～10月5日

北代縄文広場管理業務の体験

吳羽中学校(参加者5名)

平成18年6月18日～6月22日



社会に学ぶ14歳の挑戦

(出土品整理；奥田中学校2年生)

② 体験発掘

星井町児童文化センター遺跡発掘教室

期日 平成13年8月3日 場所 金屋南遺跡

体験内容 発掘調査の体験 参加者 3～6年生 16人

③ 研修会参加等

奈良文化財研究所研修「埋蔵文化財基礎課程」(鹿島学芸員)

奈良文化財研究所研修「報告書作成課程」(小黒学芸員)

奈良文化財研究所研修「歴史遺産活用課程」(堀沢学芸員)

全国史跡整備市町村協議会北信越地区協議会総会(長野県松本市;古川主任学芸員)

埋蔵文化財行政研究会シンポジウム「市町村と埋蔵文化財」(東京都墨田区;近藤学芸員)

④ 遺跡見学

月岡東縁町福寿会見学 上布目遺跡発掘調査現場

平成13年4月5日 15名

富山県埋蔵文化財センター「ふるさと考古学教室」 金屋南遺跡発掘調査現場

平成13年7月24日, 7月31日 計35名

大山町歴史民俗研究会「秋の現地研修」 金屋南遺跡発掘調査現場

平成13年11月23日 13名



⑤ 遺物見学

富山大学人文学部文化環境論演習「食」小竹貝塚出土品見学

平成13年5月15日、平成13年6月12日 計44名

⑥ 映像

日本テレビ系列火曜サスペンス劇場「考古学者 佐久間玲子」

ロケ協力 開ヶ丘中山田遺跡 平成13年7月1~8日

鹿島学芸員 発掘作業実技指導

同番組放送 平成13年10月23日 鹿島学芸員出演

富山市紹介ビデオ番組『古代遺跡は語る—富山市教育委員会埋蔵文化財センター——』

(本センター企画・オンエアとやま制作)

火曜サスペンス劇場ロケ風景

5 遺跡除草管理

北代縄文広場・境野新遺跡・古沢塚山古墳・押上遺跡・栗山古墓・板谷南遺跡

6 研究

(1) 研究会(会場: 埋蔵文化財センター)

第107回北陸古代土器研究会 平成13年11月18日

板谷南遺跡・向野池遺跡出土土師器の検討

鹿島昌也・原田幸子

(2) 論文・報告・紹介(2001年2月~2002年3月)

藤田富士夫 2001,2 「翡翠製勾玉」『MUSEUM KYUSHU』第18巻第2号

藤田富士夫 2001,3 『日本海学研究叢書 縄文時代の生産と交流—翡翠とその文化—』富山県日本海政策課

古川知明 2001,3 「富山の古代の家」『芸文とやまと』29号 (社)富山県芸術文化協会

古川知明 2001,5 「報告『富山市北代縄文の史跡整備』

『第32回文化財保存全国協議会佐賀大会』文化財保存全国協議会

小林高範 2001,6 「鏡や太刀が提子に入って出土 金屋南遺跡」

『発掘された日本列島2001新発見考古速報』『第2回「奈良時代の富山を探る」

堀沢祐一 2001,9 「越中国の律令祭祀と官衙遺跡」『第2回「奈良時代の富山を探る」

フォーラム資料』富山市教育委員会

古川知明 2001,10 「施設紹介 富山市北代縄文広場」『大境』第22号 富山考古学会

内田亜紀子 2001,10 「富山市任海宮田遺跡出土の黑色土器」『大境』第22号

富山考古学会

古川知明 2001,11 「富山市岩瀬・水橋バイ船フォーラム 越中岩瀬周辺の考古学的

調査から」『富山市岩瀬・水橋バイ船フォーラム2001発言要旨

パネリスト集』

富山市岩瀬・水橋バイ船フォーラム2001実行委員会

塙田明弘ほか 2001,11 「越中」『中世北陸の井戸』 北陸中世考古学研究会

西井龍儀 2001,11 「富山県産瓦の変遷」『北陸の瓦の歩み』

社団法人日本セラミックス協会北陸支部

藤田富士夫 2001,12 「東大寺領越中国荘園「丈部荘」の現地比定と若干の考察」

『富山史壇』第135・136号合併号 越中史壇会

財団法人水橋郷土史料館編 2001,12 『水橋郷土史料館だより』No.23

講談社編 2001,12 『週刊再現日本史第32号 江戸I⑦「伊達騒動」の真相 原田

- 甲斐、衝撃の刃傷!』
 古川知明 2002,1 「2001 弥生ミニシンポジウム in 婦中「卑弥呼時代を生きた人々」に
 参加して』『富山考古学会連絡誌 169』富山考古学会
 佐伯哲也 2002,1 「越国境紛争と末森合戦』『歴史群像シリーズ 戦国セレクション
 舊聞 前田利家 百万石の槍働き』 學習研究社
 小黒智久 2002,3 「富山市清水堂B遺跡の井戸側構造の復元』『富山市考古資料館紀要』
 第 21 号 富山市考古資料館
 小林高範 2002,3 「富山市金屋南遺跡出土の鉄鍋の検討』『富山市考古資料館紀要』
 第 21 号 富山市考古資料館
 安達志津 2002,3 「江戸時代の主食文化』『富山市考古資料館報』No.39 富山市考古資料館
 鄭明編(中村潤子・堀沢祐一訳) 2002,3 「韓国の日月形火窓石燈に対する新資料』『富山市日本海文化研究所報』第 28 号
 富山市日本海文化研究所
 新人物往来社編 2002,3 『歴史読本 特集 前田利家と信長家臣団』 新人物往来社

7 埋蔵文化財センター組織

所長 1 ————— 所長代理 1 ————— 主任学芸員 1 ————— 主事 1
 (生涯学習課主幹)

——— 学芸員 6 ————— 瞽託 3

- ①埋蔵文化財調査費 153,733 千円
 発掘調査 15 遺跡、出土品整理 5 遺跡、市内試掘確認調査、市内出土品整理
- ②体制整備・一般管理費 69,973 千円
- ③普及活動費 900 千円
 「奈良時代の富山を探る」フォーラム、展示
- ④遺跡・史跡保護管理費 23,323 千円
 北代縄文広場管理、北代縄文広場第 2 期整備、橋谷南遺跡調査

8 北代縄文広場この 1 年

(1)紹介

- 宮本長二郎 2001,5 『原始・古代住居の復元』日本の美術 No.420 至文堂
 古川知明 2001,5 「報告④富山市北代遺跡の史跡整備』『第 32 回文化財保存全国協議会佐賀大会』文化財保存全国協議会
 古川知明 2001,10 「施設紹介 富山市北代縄文広場』『大境』第 22 号 富山考古学会

(2)できごと

平成 13 年 4 月 3 日

解説ボランティア研修会

講義 藤田埋蔵文化財センター所長
 「ヒスイと玉の文化」

平成 13 年 4 月 16 日

解説ボランティア研修会

実習 安達埋蔵文化財センター嘱託
 「縄文カッキーづくり」

平成 13 年 4 月 26 日

市内遺跡発掘速報展示コーナー展示

「北代遺跡最新発掘速報展」

展示内容 岩版など
 平成 13 年 4 月 27 日 北代縄文通信第 8 号発行

平成 13 年 5 月 3 日

北代縄文広場ホームページ開設(埋蔵文化財センターと共有です)
<http://homepage2.nifty.com/kitadai/>

平成 13 年 5 月 20 日 富山市百塚町内会歩こう会(31名)・富山市安養坊町内会歩こう



縄文ボランティア研修会
 (講師: 安達嘱託)

- 会（56名）見学
平成13年5月22日 明治カルチャ・ヴィヴァン文化講座（大塚初重明治大学名誉教授ほか受講者33名）見学
- 平成13年5月25日 県政バス（39名）視察
平成13年5月26日 繩文朝市
平成13年5月27日 野焼き
平成13年5月31日 鳥取県教育委員会妻木晚田・青谷上寺地遺跡整備室視察
- 平成13年6月5日 富山大学人文学部文化環境論演習（20名）見学
平成13年6月6日 富山ろう学校（4名）・岐阜県神岡町高原郷土研究会（34名）見学
平成13年6月15日 青森県立郷土館字芸課課長鈴木克彦氏視察
- 平成13年6月18~22日 児童羽中学校「14歳の挑戦」（5名）
鹿児島県立埋蔵文化財センター（2名）視察
平成13年6月23日 富山市柳町校下健全育成会（小学校3・4年生50名）見学
平成13年6月29日 水見市教育委員会（4名）視察
平成13年6月30日 高岡市立こどり養護学校（22名）見学
平成13年7月3日 野焼き
平成13年7月5日 おかりな教室（9名）・富山市萩浦校下市民バス（56名）見学
平成13年7月25日 財団法人茨城県教育財団埋蔵文化財センター（6名）視察
平成13年7月28日～7月29日 繩文アドベンチャーキャンプ
（長岡校下19名・豊田校下30名）
- 平成13年8月25日～8月26日 繩文アドベンチャーキャンプ
（清水町校下6名・奥田校下19名）
- 平成13年9月11日 富山地域児童健全育成協議会（48名）見学
平成13年9月15日 魚津市教育委員会社会教育課（20名）視察
平成13年9月19日 21世紀女性の集い（8名）見学
平成13年9月22日 繩文朝市
平成13年9月27日 谷野具山病院（29名）見学
平成13年9月29日 古沢小学校昭和12年卒同窓会（10名）見学
平成13年10月13日 前国立歴史民俗博物館館長佐原 真氏視察
平成13年10月14日 五福校下ふるさとづくり推進協議会（50名）見学
平成13年10月18日 富山市總曲輪校下市民バス（38名）見学
平成13年10月27日 繩文朝市
平成13年10月28日 星井町2丁目町内会（18名）見学
平成13年10月31日 北代繩文通信第9号発行
平成13年11月1日 富山市教育センター富山市小・中学校初任教諭研修会（15名）見学
平成13年11月4日 富山市杉谷自治会（20名）見学
平成13年11月6日 長岡小学校昭和19年卒同窓会（14名）見学
平成13年11月10日 富山市長岡校下女性学級（40名）見学
平成13年11月14日 新潟県上越市議会議員団（8名）視察
平成13年11月19日 解説ボランティア研修会
実習 安達埋蔵文化財センター観託
「ドングリのアク抜き」
- 平成13年11月24日 東雲会（俳句の会；15名）見学
平成13年11月27日 北代繩文通信第10号発行
平成14年1月25日 北代繩文通信第11号発行
平成14年1月27日 富山市具羽消防署（3名）見学
平成14年2月3日 繩文広場で雪まつり
（長岡校下ふるさと推進協議会）共同制作絵画「縄文ー私たちのふるさと長岡」（長岡小学校6年生7名）贈呈式
平成14年2月13日 文化庁記念物課査官宜田佳男文化財調査官視察



共同制作絵画贈呈式風景

卷末言～コロボックル伝説～

埋蔵文化財センター所長 藤田 富士夫

明治の中頃、東京帝国大学教授・坪井正五郎は石器時代人を先住民とみて、それはアイヌ伝説にあるコロボックルだとした。コロボックルは、アイヌ語で「フキの葉の下に住むもの」といった意味で、小人族を指す。この説はアイヌ以前の先住民(石器時代人)を、伝説を基にして証明しようとしたもので、明治後半に広く流布したが、坪井の死とともに忘れ去られてしまった。コロボックル説は、メルヘンの世界を見るようで愛らしい。けだし坪井が、偽りの原人論を信じた現代考古学を知つたら何と言うであろうか。私には坪井説の滑稽さを直には笑えない。

利賀村には、コロボックルを思わせる伝説が残っている(『利賀の民話』利賀村教育センター1982年)。意訳すると、細島の川向の山頂に「クロッポコ人種」が住んでおり、身長1mくらいで、小さい穴を掘って住まいとしていた。鳥や獣を狩り、野山の幸を食していた。細島地区の總山や長谷基勝さんの山がそれであるという。一度、現地を訪ねてみたいと思っている。

森秀雄氏は、昭和20年ころのこととして、「中新川郡白萩村(現・上市町)極楽寺へ石器採集に行った時、小学校の生徒達が石器のことをコロボックルとよんでいた」「これは、私よりも以前に石器採集に来た人が、石器について土地の人に話をやり、コロボックルが使ったと説明したのでしょうか」と述べている(『大昔の富山県 日本の大昔』清明堂書店 1951年。「森秀雄先生」を囲んで“あけぼのを語る”『富山市考古資料館紀要』19、1999年)。

これらの逸話の背景には、森氏が指摘されるように明治期の坪井人種論の浸透が予想される。一方、12世紀前半に成立した『今昔物語』(巻第31-第18話)に、源行任が越後国司であったとき、越後の国に「広さ二尺五寸、深さ二寸、長さ一丈ばかり」の小さな舟が打ち寄せられた。それは越後の北の世界のもので、度々越後に打ち寄せられることがあるといった伝聞伝承が記されている。

当時、越後の北の世界(北海道を中心として)には、後のアイヌ文化を担う擦文文化が展開していた。『今昔物語』の説話が、コロボックル伝説のような話に基づいていたかは分からぬ。けだし、坪井人種論以前に北方に小人族の世界が想定されているのが面白い。ここに私の備忘として記しておきたい。



(斎藤 忠『日本考古学史』吉川弘文館 1978年より)

富山市教育委員会 埋蔵文化財センター 所報 富山市の遺跡物語 第3号

平成14年3月29日

編集・発行 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター

〒930-0803 富山市下新本町5-12

TEL 076-442-4246 FAX 076-442-5810

URL <http://homepage2.nifty.com/kitadai/> (北代絶文広場と兼用)

E-mail maizoubunka-01@city.toyama.toyama.jp

印刷 大栄印刷株式会社

〒939-8232 富山市南央町3-41

TEL 076-429-7080



このロゴマークは朝谷南遺跡で出土した
軒丸瓦の文様をデザインしたもの